CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
Provided by Kwansei Gakuin University Repository

2010年
10月18日
月曜日

日本語濁音考

大高博美　教授（言語論、プロソディー、普遍性）

本日は日本語における濁音化現象をテーマに取り上げます。これは、私の研究分野である音声学・音韻論に沿うものなのですが、チャペル講話でこんな堅い話を取り上げるのは、実はこれが初めてです。

さて、日本語には「連濁」と呼ばれる現象があります。二つの語が繋がって一つの複合語が作られる際に、後続語の最初の無声子音が有声化する現象のことです。例えば、「神」と「棚」（タナ）で「神棚」（カミダナ）ができますし、「紙」と「ハサミ」で「紙バサミ」となります。日本語においてこの連濁は強力な音韻規則の一つで、例を探すのはいとも簡単です。「海」と「サル」で「海ザル」、「雨」と「カエル」で「雨ガエル」というふうに。

では、なぜこの連濁は起こるのでしょうか？実は、すでに上で答えているのですが、繰り返すと、複合語を作るためです。複合語の生成というのは、二つ以上の語（形態素）が集まって新に別の意味をもつ語を作り出すという営みで、どの言語でも見られます。英語では、whiteとhouseでWhitehouse（大統領官邸）、greenとhouseでgreenhouse（温室）が出来あがります。文字で見れば、2語から成る句と1語になった複合語では違いが一目瞭然ですが（後者では分かち書きされていない）、実は聞いただけでも分かります。句では、どちらの語にも同レベルの強勢が置かれますが、複合語では最初の形態素（語）に第1強勢が置かれるからです。日本語でも同様です。ただし日本語では、強勢ではなく、ピッチ変化が利用されます。例えば先の「神棚」では、「神」は頭高の、そして「棚」は平板のアクセントパターンをもっておりますが（つまり本来ならピッチ変化が「ミ」で一旦下がって「ナ」でまた上がることになる）、複合語になると「アクセント核」（語中でピッチが下がるところ）は一つになって「カミダナ」となります（つまりミとダの部分が高くなっています）。

一方、2語の連続が複合語生成目的ではなく単なる並列にある場合、この現象は起こりません。ですから、「やまかわ」と「やまがわ」では、構成素は同じであっても意味が異なるわけです。後者は、「山を流れる川」のことで、前者は単に「山と川」という意味です。

濁音化が起こらない理由が他にもあります。まずライマンの法則として知られている生成抑制規則です。例えば「海」（うみ）と「へび」では「うみへび」（cf. 海ガメ）のままですし、「大」（おお）と「トンボ」で「おおトンボ」（cf. 大ガラス）のままで濁音が生じません。理由は、後続要素が始めから濁音をもっていると連濁は生じないからです（「大ばしご」は例外）。そしてもう一つの理由は、三語以上から成る複合語の統語構造が右枝分かれになっている場合です。ですから「にせ+ざくら+まつり」とは言えても、「にせ+ぐすり」とは言えないのです。後者では意味構造が右枝分かれ（つまり「にせ」+「さくら+まつり」）となっています。もちろん「にせざくら」を祝うお祭りなら「にせざくらまつり」（左枝分かれ構造）も可能です。実は、同じことが英語の複合語規則でも言えるのですが、それにしても何とも不思議ですね。

■